

# 第三百回 青葉会

平成二十三年三月二十四日(木) 午後六時〜九時

丸紅一階来客食堂 談話室

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉  
〈出席者〉

石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子  
朱牟田恵洲 豊田ゆたか 中野一灯 中山芳博 橋口隆 山崎亜也 山内天牛  
伊賀山そらお 高梨由美子 土谷堂哉 福島正明 南平和夫 宮内規雄  
渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明 村田くに子  
山崎青史 ゴシックは選者の天

《選者吟》

釣銭を大道芸へ梅日和  
満開の梅も横揺れ余震また  
猿山の天辺(てっぺん)取りつこ木の芽晴  
長ながと時作る鶏春真昼

(大地震発生時)

停電の知らせ近づく春の闇

《互選句》

七点

☆ 百歳の母の絶筆花だより

六点

☆ 春障子鉄瓶に立つ湯気の影  
約束の再会を断つ春の地震  
がらがらの寄席を脱け出て鴨南蛮

(青・恵：鴨南蛮は季語？少し無理)

五点

☆ 卒業式故郷の復興誓ふ子等  
和毛立て巢立の風を測りをり

(青：風に乗りそこねれば待つているのは死)

四点

☆ 春寒に荻江節(をぎえ)の渋さ味得せり  
(正↓「荻江節春の寒さを斥ける」では如何?)

荻江節演奏会

三点

☆ 卒業歌被災地の子ら眉上げて  
白木蓮死者の命の薄明り

(正↓「荻江節春の寒さを斥ける」では如何?)

二点

☆ ここかしこ「入荷予定」の春寒し  
春待たず被災で逝きし人哀(かな)し

一点

☆ 新築の祝ひに雛の客となり  
春の雪昨日のことをすぐ忘れ

斑紋のずれて猫の子もらはれず

☆ 上履きの干されしままに春休み

☆ 茎立や忘じたること忘じゐて

☆ 探梅のリユックに句帖とワンカップ

☆ 春の大地震(なち)君の死知らず七日過ぐ

(☆↓↓「大地震や君の死知らぬ春七日」)

☆ 辛夷咲く外つ國からのなる見舞

☆ 此岸にて在ることの意味彼岸かな

☆ 愛想よき税務署員や申告す

☆ 天牛(紀・恵・亜)

☆ 全(万・恭・五)

☆ 亜也(紀・五・龍)

☆ 全(万・恭・五)

☆ 天牛(紀・恵・亜)

全 (恭)

ゆたか (万・清・孤・弘・允・く・亜)

一灯 (堅・清・猛・孤・芳・く・天)

清 (万・堅・恭・一・芳・亜)

紀久男 (恭・五・一・芳・亜・天)

恭延 (堅・忠・敏・隆・允・く)

弘子 (万・孤・恵・一・青)

ゆたか (孤・敏・一・允・亜)

芳博 (ゆ・隆・允・亜・青)

盛雄 (堅・恭・孤・五・隆)

紀久男 (万・弘・敏・正)

恵洲 (弘・ゆ・允・青)

正明 (堅・紀・忠・五)

亜也 (万・紀・隆・正)

猛 (堅・清・敏)

忠彦 (万・清・孤)

全 (一・正・天)

弘子 (恵・一・青)

全 (清・隆・く)

弘子 (万・芳・允)

恵洲 (清・ゆ・く)

芳博 (万・紀・猛)

全 (紀・五・龍)

全 (万・恭・五)

天牛 (紀・恵・亜)

二点

長閑なる街を呑み込む大津波

清 (紀・隆)

歌右衛門十年祭「先代萩」

歌右衛門譲りの政岡冴返る

紀久男 (恵・く)

大津波抗へあらがうを得ず春の浜

恭延 (弘・敏)

なるの春地球で生きている実感

忠彦 (恭・青)

彼岸明け三百回を寿ぎぬ

五郎太 (紀・正)

うる覚えの紙飛行機折る日永かな

恵洲 (正・青)

春愁や霽へみお引く船の遅々として

由美子 (紀・芳)

開かれぬ春場所聞こえぬ触れ太鼓

堂哉 (忠・弘)

原発の神話崩れて春の闇

ゆたか (猛・敏)

妻旅に春菜の煮炊旨くなり

全 (龍・天)

先々に願ひかけたし犬ふぐり

芳博 (五・天)

いさぎ良くありたし白木蓮へはくれん空に立つ

全 (弘・ゆ)

着飾りて少し太目の成人式

和夫 (忠・亜)

菜飯炊く温かきことの有難み

亜也 (猛・天)

五時間半吊り皮を持つ春の地震へなる

天牛 (猛・忠)

啓蟄や何におびえる犬の声

全 (隆・青)

☆ 彼岸会に四人姉妹の微酔かな

盛雄 (万・紀)

みちのくに花見を先に譲りたし

そらお (紀)

原発の除染見守る山笑ふ

清 (龍)

震災の騒ぎを余所に月朧

全 (猛)

いつまでぞ寒暖凌ぐ弥生雪

猛 (龍)

国震へりて同胞失せり三一一へさんいちいち

恭延 (紀)

早春の町は何処や大津波

全 (敏)

裏の梅やつと綻ぶ余震かな

忠彦 (龍)

3・1・1へさんいちいち人呑むなるの海黒し

全 (猛)

大地震へなるや今年も辛夷高く咲く

五郎太 (忠)

春の宵ブルーチーズに酒合はす

全 (忠)

連翹やパリコレの客足を留め

全 (芳)

余震とは言え春宵をざわめかす

恵洲 (五)

☆ 香奠袋の我が名ゆがみて春寒し

全 (万)

春波のざわめき遠く島ひとつ

由美子 (紀)

海峡の須磨の小島や春夕焼

堂哉 (ゆ)

庭に摘む春菜浴びしや放射能

ゆたか (恭)

絵硝子に夕日かがよふ春の鐘

一灯 (ゆ)

山風の里におとろふ梅月夜

全 (龍)

花ひらり花びらはさむ俳句帖

芳博 (清)

春の海床埋め尽くす棺かな

隆 (正)

三月の何やら希望のある雑木

正明 (紀)

蜆汁母のエプロン姿かな

規雄 (天)

なる揺りて一味同心浅き春

亜也 (恵)

●次回青葉会

四月二十八日(木) 三百回記念向島吟行(雨天決行)

午前十一時半 雷門集合、食事。午後一時～五時半 三囲神社長命寺等予定

午後六時～九時 料亭「きよし」にて句会及び祝宴

五月二十六日(木) 午後六時～九時 丸紅一階談話室

▲当季雑詠各自五句 投句二句

以上文責

紀久男

平成二十三年三月青葉会

一、昭和60年(1985) 8月故川合絹漱先生、故黒川章彦さんが発起人となつて発足をした青葉会も四半世紀、三百回を迎えました。25年間に物故者10名：佐藤達雄さん、章彦さん、倉持正さん、絹漱(友之)先生、中西砂糖子(敏)さん、和田穰さん、西村博明さん、小池治(統)さん、村岡英樹さん、佐野明彦さん。

辞められたり休会中の人20数名。その内仙台在住の山内純二さんは「天為」同人でご活躍されておられます。

三百回記念合同句集に20余名の作品と4名の評論・エッセーが寄せられています。前回発行した二百回記念句集よりも質量共充実したものを目指しております。五月上梓の予定ですが、乞う御期待です。

二、天牛さんの乾杯の挨拶が始まった今回は先生以下15名出席。投句7名。(残念乍ら関西の盛雄さん、堂哉さんは大地震で、常連の正明さんは術后で欠席されました)

大震災の節電下、少々寒かったです。飛び切りの美酒とつまみが揃い、飲む程にいつもの元氣な句会となりました。弘子さんの捌きでテンポよく進み、御覧のようにゆたかさん、一灯さん、恭延さん、清さん、小生が高得点となりました。

話題は勿論、大震災のこと(芳博さんの句にありますように友人が犠牲に) (海外マスコミのセンセイシヨナルな報道) (首都圏の買いだめ)。回覧した丸紅飯田俳句部句集『吾亦紅(われもこう)』(昭和33年11月発行。美装函入り237頁)そして向島吟行のことなどでした。

◎寄贈：先生から露の臺の五平餅、弘子さんから鶴屋吉信の銘菓「紡ぎ詩」天牛さんの栗焼酎原酒「ミステリアス・リザーブ」(四十万町)、恵洲さんの「澤乃井」大辛口、五郎太さんの「寒梅」大吟醸(埼玉・久喜) 堂哉さんの「呉春」一升壺(池田)

### 三、当日の回覧

(一) 敏郎さん、規雄さん、福西紀美子さんからの三百回祝辞。(二) 明彦さん追悼謡曲会番組。(三) 龍平さんの座禅会報掲載エッセー「テレサとマイルズ」。(四) 青葉会二百回記念句集(五) 前述の『吾亦紅』・・・森長英さん(当時の副社長)ら30名916句。「雪解」主宰皆吉爽雨の序文。市川忍さん(当時社長)の題字。編集は田中時男さん。

### 四、関係者近詠

兔抱く卯年生まれの母子かな

万里子

春寒や余震のおそれきざみに

くに子

買初や花柄を選ぶタジン鍋

全

原子炉を制御し得るや春寒し

恭延

白鳥の背から項へ水陽炎

全

3・1・1大地震を忘れまじ

猛

寒中梅産着は縫ひ代外側に

全

大津波港の春は遠のくや

そらお

遺言めく言葉背で聞く冬紅葉

全

三陸の春を津波が地獄絵に

清

葉牡丹や一家の求心力は母

全

なみ

紀久男

語りたき夜には低き冬の星

弘子

地震津波原発事故に春北風

紀久男

鉄橋の短きことよ初電車

全

春の日や怒(い)かる龍ならむ大津波

芳博

大寒や枕頭の灯を点しおく

恭延

ローリングストーンズ聞く春の夜の屋形船

天牛

寒の入朝札続く詰所かな

和夫

春競ふ薄紅色(うすべに)黄色青野川

猛

海老蔵の騒動去るや初不動

紀久男

万歩計歩き続けて雛の京

隆

——『萬緑』4月号——

入学試験父の外套着て京へ

規雄

停電にシヤンデリアのごと辛夷咲く

紀久男

有明の月へ一番太鼓かな

孤舟

卒業や母つれ京の寺めぐり

規雄

「俳句四季」4月号に「川越祭」と題してカラー二頁。町の紹介と作品掲載

孤舟

焚火の輪解け夕さりの一番星

孤舟

「喜怒哀楽」二月号

孤舟

平成二十三年四月五日

紀久男記